季刊特別号

グリーンデザイン部

門松ものがたり vol.01

1970年代 糸満市阿波根農場（現在の南部支社）

桃原農園の手作り 門松ができるまで

新しい年を迎える門松を、一つひとつ丁寧に手作業でお作りしています。
私たちは1970年代から門松づくりに携わり、受け継がれてきた技術と工夫を大切にしながら、今も変わらず作り続けています。
見た目の美しさだけでなく、安全に飾っていただけることにも配慮し、素材選びから仕上げまで、すべての工程に意味を持たせています。
これまで積み重ねられてきた多くの先輩方の知恵と工夫、その歴史を受け継ぎながら、一つひとつ丁寧に仕上げています。

1、素材選び

門松に適した竹は県内での確保が難しいため、毎年、九州から海上輸送で取り寄せています。竹林から運び出す際は、引きずって傷が付かないよう、細心の注意が払われています。

松は県内北部地域で育てられた琉球松を使用しています。
専門農家が、台風などの災害で傷まないよう、1年間かけて管理した松を使用させていただいています。

海を越えて届く竹

門松は素材によって印象が大きく変わるため、竹・松・飾りを一つひとつ手に取り、状態を見ながら選んでいます。同じように見える素材でも、実際に使用できるものは限られています。
海を越えて届いた竹の中から、さらに状態の良いものだけを選び、仕上げに使用しています。
手間はかかりますが、素材の質にこだわることが、全体の品格につながると考えています。

次号へつづく。次号掲載予定日：5月22日

季刊特別号

グリーンデザイン部

門松ものがたり vol.02

ベテランから若手へ、受け継がれる職人の技

門松づくりの原点
職人の手仕事

門松づくりは、竹を組み立てる前の「下準備」に最も時間と手間をかけています。
特に、土台となる樽にワラコモを巻く作業は、一つひとつ手作業で行うため非常に手間がかかり、毎年8月頃から順次制作を始めています。
見た目の美しさはもちろん、長期間きれいな状態で飾っていただけるよう、細かな部分まで丁寧に仕上げています。
こうした下準備をしっかり行うことで、完成後の門松の安定感や品格につながっています。

2、土台づくり・竹の加工

土台の樽には、昔ながらの風格と趣を大切にしたいという思いから、ワラコモを丁寧に巻き、伝統的な佇まいを表現しています。
運搬時にも形が崩れないよう、力を込めてしっかりと巻き上げています。

太さを選別した竹を、サイズごとの長さに切りそろえていきます。
竹の表面に傷をつけないよう丁寧に作業を行いながら、状態の良い竹を見極める目利きも欠かせません。

門松の『顔』をつくる技

竹を斜めに切り上げる工程を斜切りといいます。
職人はこの斜めの切り口を「顔」と呼びます。桃原農園の門松は、顔を長く仕上げるのが特徴で、その美しい斜めの顔は一番の特徴でもあります。
短くすれば使用する竹を抑えることもできますが、美しさにこだわり、あえて長い顔で切り続けています。
一本一本異なる竹のゆがみを見極めながら美しく長い顔を作るには熟練の技が必要です。

次号へつづく。次号掲載予定日：6月5日

季刊特別号

グリーンデザイン部

門松ものがたり vol.03

伝統を支える見えない工夫、守りながらより良く

立て込みの技
美への工夫

いよいよ門松の立て込み作業に入ります。
立て込みで重要なのは、対で飾った際に美しく対称になっているか、また全体のバランスや竹の角度が揃っているかです。
さらに、お客様の設置環境に合わせて、強風にも耐えられるよう土台に重しを加えるなど、設置期間中に転倒しないための工夫も施しています。
昔ながらの伝統的な工程を守りながら、見えない部分では材料や構造を工夫し、品質を保ちながら価格を抑える改良にも取り組んでいます。

3、立て込み

土台に、美しく対称にそろえた竹を据えていきます。
この後の松を挿す工程でも重要な役割を果たすおがくずを使い、竹をしっかりと固定していきます。バランスを見ながら、二人一組で丁寧に作業を進めます。

据える竹は、3本1組にまとめていきます。
対になる竹は、一本の同じ竹から切り出したものを使用し、左右の表情や風合いが揃うようにしています。

『顔』を美しく保つ工夫

桃原農園では、時代の変化に合わせて門松づくりのさまざまな工程を改良しています。
近年では、沖縄特有の湿気の多い環境でも安心して飾っていただけるよう、カビが発生しにくい下処理や乾燥にも手間をかけています。この工程は時間と手間がかかりますが、仕上がりを左右する大切な工程のため、省くことはしていません。
沖縄の地で長年門松を作り続けてきた、桃原農園ならではの技術と工夫です。

次号へつづく。次号掲載予定日：6月19日